

創価大学の価値創造教育、そのコンセプトと実践

田 中 亮 平

尊敬するジュンバ副学長、アカラ教育学部長、オダリ文学科長、インダンガシ先生、著名な教員の先生方、親愛なる学生の皆様、ご参加の皆様。

はじめに、お招きいただいたご厚意に心から感謝申し上げます。基調講演者としてここに立ち、創価大学の価値創造教育についてお話しさせていただけることを、大変光栄に存ずるしだいであり、あります。

今回の国際会議のテーマは、「持続可能な開発のための価値創造教育」であります。私どもの大学の主なコンセプトの一つである価値創造教育が、日本から遠く離れたここケニアの地で注目を集めていることを知り、大変うれしく、またありがたく思うと同時に、大きな責任をも感じているところであります。

本日の私の講演のテーマは、「創価大学の価値創造教育、そのコンセプトと実践」であります。簡単な前置きが続いて、まず価値創造教育という概念の歴史的背景をお話しします。それがどのようにして形成され、受け継がれ、現実に学校や大学で実践されてきたかということです。次に、価値創造教育が学生たちにどのようにポジティブな影響を与え、どのような成果をもたらされるのかについて、いくつか具体例をご紹介します。最後に、グローバル社会としての現代世界における価値創造教育のもつ効果という点、とりわけそれが日本社会とグローバル社会の両方で積極的なリーダーシップを発揮できる人材の育成にどのように貢献できるかという点についてお話しさせていただきます。

1. 価値創造教育の歴史

まず、創価大学について簡単に紹介させていただきます。創価大学は1971年に東京都八王子市に創設されました。創立者は言うまでもなく、池田大作先生です。大学開学当時、経済学部、

Ryohei Tanaka (創価大学文学部教授)

*本稿はケニア・ナイロビ大学で開催された「持続可能な開発のための価値創造教育に関する国際会議」(2016年9月29日から10月1日)における基調講演を翻訳したものである。「1. 価値創造教育の歴史」は神立孝一経済学部教授が、ケニア・ナイロビ大学で行った講演「Soka Education and University Founder Dr. Daisaku Ikeda」(2013年12月10日)に拠っており、それ以外の部分の執筆および講演は田中亮平が担当した。

法学部、文学部という3つの学部がありました。ご存知の通り現在は、8つの学部に10の学科を持つ大学に発展しました。創価大学では約8000名の学生が勉学に励んでいます。

「創価」という言葉は「価値創造」を意味します。それは我が大学の教育目標でもあります。つまり創価大学は価値創造教育が実践されている場所だと言えます。

次に、「創価教育」がどのように発展してきたのか、それが創立者によってどのように実践されてきたのかをお話ししたいと思います。

最初の「創価教育」提唱者は、牧口常三郎先生でした。牧口先生は1871年生まれで、小学校教育に携わり、最終的には校長もつとめました。牧口先生は教師としての経験を通して、真の教育とはどういうものかを考え、熱心に欧米の教育学、社会学、哲学などを学びました。その過程で、「創価教育」の概念を発展させたのです。そして価値創造教育を行うことができる教育機関を設立しようという夢を抱きました。しかし、第二次世界大戦中に投獄され、拘留所で亡くなりました。牧口先生の使命を引き継いだのは戸田城聖先生でした。戸田先生は牧口先生と同じく投獄されましたが、終戦直前に保釈されました。彼は、牧口先生が叶えられなかった夢を実現させるため、可能な限り努力しました。しかし、拘留所で著しく体調を損なっていたことが原因で、その夢は叶えられることがなかったのです。彼は牧口先生と自身の夢を池田大作先生に委ねました。池田先生は創価教育の実践という課題を受け継いで献身的に努力し、1971年に創価大学を開校させて二人の先師たちの夢と理想を現実のものにしたのです。

さて、そもそも「創価教育」とは何でしょうか。牧口先生の言葉をみてみましょう。

牧口先生は、『創価教育学体系梗概』の「緒言」で、以下のように述べています。

「創価教育とは、全く新しい名称であるが、何を意味するか。実際に役立つ生活即ち価値創造を指導するといふことに外ならぬ。」(牧口常三郎『創価教育学体系梗概』、牧口常三郎全集第8巻、390頁)

そして以下のように続けています。

「然らばどうして教育の目的を明かにするか。人間生活の目的を教育の目的とするより外に途がないことは固よりであらう。」(393ページ)

「単刀直入、幸福の二字を以てこれを提出したら何人がこれに異議を挟むものがあるであらうかといふのが本篇の眼目である。」(393-4ページ)

「教育の目的とする幸福の内容は要するに価値の創造獲得以外に出でない。」(394ページ)

つまり、「創価教育」の目標は、このような教育を受けたすべての人が、価値創造を通じて幸せになるということです。この原則に基づき、池田大作先生は創価大学を創立しました。

創価大学創立に際して、池田先生は以下のような建学の理念と理想を示しました。

人間教育の最高学府たれ
新しき大文化建設の揺籃たれ
人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ

これら3つが建学の理念です。開学に先立つ2年前の1969年5月3日に、創立者が自らこの理念を発表したのです。そして、創価大学になぜそれが必要なかをひとつひとつ詳しく説明しています。

第一の理念「人間教育の最高学府たれ」について、創立者は以下のように述べました。

「人間を社会のメカニズムの部品と化し、人間性を無視している現代の教育界の実情に対して、創価大学は、あくまでも社会を動かし、社会をリードしていく英知と創造性に富んだ、全体人間をつくっていく学府でなくてはならないという意味であります。」（『創立者の語らい』、1985年、37ページ）

次に、「新しき大文化建設の揺籃たれ」という理念について、池田先生は以下のように述べています。

「行き詰っている現代文明のなかにあって、大仏法を根底におき、人間生命の限りなき開花を基調とする、新しい大文化を担っていくことであります。」（『創立者の語らい』、1985年、37ページ）

そして、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」という理念については、以下のように述べています。

「人類の平和を標榜したゆえんは、新しき文明の建設といい、未来社会の開拓といっても、平和なくしてはありえないからであります。」（『創立者の語らい』、1985年、37ページ）

これらの理念は、人間「教育」と新たな「文化」を保持しながら、平和を希求する個人として、創価大学で成長する望ましい学生像をまとめたものです。池田先生は、こうした資質を有する者を「創造的人間」と呼びました。

創立者は開校3年目、創価大学の新生入生に以下のように促しました。これはまさに創立者の「大学はどのようにあるべきか」、「大学はどのようなものを目指すべきか」についての表明だったのです。

「我が創価大学の『創価』とは、価値創造ということであります。すなわち、社会に必要な価値を創造し、健全な価値を提供し、あるいは還元していくというのが、創価大学の本来目指すものでなければならない。」(同上、65-6 ページ)

翌年、第4回入学式では、重要なキーワード「創造」をさらに説明し、創立者は以下のように述べました。

「私の胸にあふれてやまぬ“創造”という言葉の実感とは、自己の全存在をかけて、悔いなき仕事を続けたときの自己拡大の生命の勝ちどきであり、汗と涙の結晶作業以外の何物でもありません。」(同上、144-5 頁)

そして先生は、この「創造」の行為を続けることによって、人は自身の真の可能性を引き出すことを学びうると述べます。

「創造的生命こそ、人間の人間たるゆえんである。」

「この“創造的生命の開花”を、私はヒューマン・レボリューション、すなわち『人間革命』と呼びたい。これこそ諸君の今日の、そして生涯かけての課題なのであります。」(同上、145-6 ページ)

創立者池田先生が、みずから私たちに生き方の模範の一つを示し、教えてくれました。池田先生こそが「創造的人間」として「価値創造」の人生を具現化した人物なのです。自身の人生という模範を通して、先生は私たちになすべきことは何かを教えたのです。

現在、創価大学には、世界各地から500人以上の留学生が集まっています。私たちがここで追求しているのは、「創造的人間」たることに他なりません。

価値創造教育のコンセプトの実践は、日本の創価大学だけに限られるものではありません。2001年、アメリカ創価大学がカリフォルニアに開学しました。この大学もまた、1971年の創価大学の開学にあたって、創立者が全魂を傾けて策定した構想を具現化しています。米国での大学設立の根底にあって推進力となったのは、「創価教育」が世界中どこであろうと受け入れられる理想的な教育形態であるという確信と、世界中の人々を幸せにしようとする哲学であったのです。

池田先生は、この2つの大学だけでなく、創価教育の学校のシステムを創設しました。最初に、創価大学に先立つこと3年前の1968年、東京に中学校と高校が開校しました。これらは男子校でした。女子の創価高校は5年後に開校しました。現在これらはすべて男女共学となっています。その後、創価小学校が1978年に東京に、1982年に大阪に開校しました。創価幼稚園は1976年に札幌で開園しました。そしてまさに今月の初め、本学のキャンパス内に保育所が設立されまし

た。創価大学には以前から年齢制限のない通信教育の課程があり、この保育所開設により、創価の生涯教育の最後のピースが埋まったと言えます。

2. 価値創造教育の及ぼす影響：2つの実例

さてここで、価値創造教育を自分の人生に活かし、自分自身と社会のために価値を創造してきた多くの学生の中から、2つの実例を紹介したいと思います。

まず、皆さんのなかにご存じの方もいるかもしれない、ある女子学生についてお話します。（以下創価大学キャリアセンター編「Career Center Navi Vol. 6「リアル～私の4年間～」による）彼女は今春、創価大学を卒業し、現在日本マイクロソフトに勤務しています。彼女の故郷は宮城県の石巻です。ご存じのとおり、5年前に地震や津波による甚大な災害が襲った地域の真っ只中でした。石巻はほぼ完全に壊滅状態となった多くの町のひとつでした。地震の前の平和な高校時代のある日、彼女はテレビでアフリカに関するドキュメンタリー番組を目にします。そして大学に入学したら、その地を訪れようと夢見るようになったのです。テレビでは人々の陽気な笑顔やアフリカの独特の文化を映しながらも、その現実の有様や困難な状況をも映し出していました。それを見た彼女は、「アフリカが私を呼んでいる」と感じたと言います。

しかし、創価大学に入学後、キャリアカウンセラーと自分の夢について話しをしたことがありました。その時カウンセラーに「あなたがアフリカに行っても役に立てないよ。わざわざ行かなくてもその航空代を寄付したほうが、多くの人を救えるよ」と言われたのです。この言葉で彼女は、本当に他人を助けたいなら、夢をみるだけでは無意味であると気づきました。その日以来、彼女は睡眠時間を削るほど懸命に勉強しました。他人に貢献できるだけの知識やスキルを習得するために最善を尽くしたかったからです。こうした努力が報われて、彼女はナイロビ大学への交換留学生に選ばれたのです。

彼女はナイロビでの毎日を、勉強や寮生活、インターンシップやボランティアなど、できる限り積極的に過ごしました。その結果、10ヶ月後に帰国したときには、アフリカの人々に貢献したいという意志はなおいっそう強くなっていました。一般的に、日本の学生は最終学年に就職活動を始めます。日本へ帰国後、彼女は真剣に考えました。どの業界、どの会社で働けば自分の夢を実現できるのか。彼女の答えはIT業界でした。たとえばインフラストラクチャーや建設などと比べ、この業界ならより迅速かつ劇的に、人々の生活を変えることができると考えたのが、決断の理由でした。

ここまでの彼女の人生を振り返ってみると、彼女が一生を通して追求したいと思った最も大切な価値は、人々のより良い生活のために貢献することでした。しかし社会でその価値を実現するためには、深く考えずにただ行動するだけでは不十分であることを知るのでした。価値を創造するためには、学問を通じて得られる専門知識やスキルが必要不可欠であることに気付き、懸命に努力しました。他人の幸福のために働きたいという願望を、問題解決を可能にする知識やスキルと結び合わせることによって、社会に価値を創造することができます。価値創造教育にとって、こ

うした人間を育成することが目標です。この学生も、こうした価値創造教育の美点を具現化した創造的人間の一人なのです。

もう一つ例をあげたいと思います。今度は男子学生です。(以下「Soka University News 83号」による)彼も、2013年8月から2014年7月までナイロビ大学で学びました。ケニアで1年を過ごす決断に至った理由を、彼はつぎのように説明しています。「日本からできるだけ遠い場所に身を置いてみたいというのが最も大きな理由でした。想像もできない、誰もできないような経験をしたかったのです」と。この希望は、ナイロビで生活を始めるとすぐに叶えられました。しかしながら、4ヶ月ほど経った頃には、自分で望んだ決断だったのに、置かれた環境の困難さにすっかり意気消沈してしまったのです。

そのとき彼の中で何かが変わりました。それは価値創造へ向けての変化でした。彼は考えたのです、「想像以上に厳しい環境のせいにして、環境を変えるための行動を起こしていない」と。その日から挑戦の日々が始まりました。独学でスワヒリ語を学び、仲間の学生と交流を深め、授業で積極的に質問をし、ルームメイトとディスカッションをして授業を振り返るようにしました。こうして彼の環境は徐々に変化し始めたのです。

授業のないときには、日本企業が立ち上げる、無電化地域での事業にも参加しました。ケニアでの経験を活かし、帰国後は学生グループのリーダーとして、ある政策提案コンテストで一位を受賞しました。現在はシンガポールのグローバル企業で働いています。

彼のケースでは、意気消沈状態から創造的な人間への変化は、自分の意志と行動で環境を変えようと決めた瞬間に始まったのです。

創価大学の文系A棟の入り口前には、ブロンズ像が並んでいます。これは、開学を記念して、創立者の池田先生から寄贈されたものです。それぞれの台座には、学生に向けた池田先生の言葉が刻まれています。一方には「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」、もう一つには「労苦と使命の中でのみ 人生の価値は生まれる」とあります。

学問の目的とは何か。その答えはひとりひとり違います。ある人は名声のため、ある人は財産のため、ある人は真理の探究のためと答えるかもしれません。いずれの場合でも、「何のために」という問いかけは、学生がそれぞれ持つ何らかの価値を前提としています。先程お話した女子学生は、アフリカの発展への寄与の中に価値を見だし、男子学生は、自分の限界を超えて環境を変えるなかで、社会に価値を創出すること自体に価値を見出しました。両者に共通しているのは、他者や社会のためという点です。他者の幸福への貢献のなかに価値を見出すこと、現実に価値を創造すること、そしてこのプロセスを通して自分自身の幸福を感じることに、これこそ価値創造教育の意義にはかなりません。またそれは、牧口先生から池田先生へと至る価値創造教育の継承の歴史に見られる特徴であり、同時にまた現今の創価教育システム全体に現れている特徴でもあります。池田先生のもう一つの贈言「労苦と使命の中でのみ人生の価値は生まれる」も、この特徴を簡潔に表現したものとなっています。

理事長の田代氏は、東京の創価高校と創価大学の第一期生でした。彼は長年にわたって池田先生の秘書として働き、その中で池田先生が価値創造教育のコンセプトをどのように実践してきたかを間近に経験してきました。

一つ目の碑文について、田代氏はあるインタビューの中で述べています。「我々が勉強するのは何のためなのか、それを自分自身に問うて、努力していこうということです」と。(「Soka University News 83号」による)。さらに田代氏は池田先生の次の言葉を引用しています。「創価大学は民衆の側に立ち、民衆の幸福と平和を守るための要塞であり牙城でなければならない」。「民衆の平和と幸福」という言葉の中には、価値創造教育の目的が明確に定義されています。

田代氏はさらに池田先生の次の言葉を引いています。「真に望まれる人材とは、高い理念を持った優れた人格者であり、豊かな個性を持ち、その上で学問、技術を使いこなしていける革新的にして創造的な人間である」。これを踏まえて、田代氏は、「これらは、いずれも創立者が開学当初から一貫して語りかけてきた建学の根本精神であり、卒業生や教職員に受け継がれてきたものと言えるでしょう」と述べています。

3. グローバル社会における価値創造教育

現代では、特に1990年代以降、至る所でグローバル化が進みましたが、日本ももちろん例外ではありません。近年日本では、知識基盤社会の到来が叫ばれています。知の蓄積や伝達を主たる任務とした高等教育の役割も変化しなければならないと言われています。インターネットを使えば世界中の最新の知識や情報にアクセスできる状況の中では、その知識や情報を整理し活用するスキル、情報を適正に判断し、それをもとに思考し、他者に向けて表現する力の養成も大学教育の使命として重要性を増しています。またそれに留まらず、それらの知識や思想を何のために使うのか、そこからどのような成果を取り出し、異なる利害や文化的背景を持つ人々との対立を克服して共生の方途を生み出していくか、こうした協働性をそだてることも大学の使命であるとされます。

高等教育のレベルだけでなく、初等中等教育のレベルにおいても、このようなコンピテンシーの重要性が認められています。それらは例えば、OECDのDeSeCoにおけるキー・コンピテンシー、21世紀型スキル、さまざまな国で開発されているナショナル・カリキュラムなどにおいて位置付けられています。日本の文部科学省も、学校教育全体の目標として、上述のような構成要素からなるコンピテンシーの成長を掲げています。

知識や技能の習得に限らず、こうした全人格的な教育こそ、まさに価値創造教育が、その発足当初から志向してきたものであります。先にも述べたように1971年の創価大学の開学に当たって、池田先生は「人間教育の最高学府たれ」という指針を示されました。また1973年と74年にはその人間教育の内実を自己の人生と社会のために価値を創造する人材の育成と定義されました。したがって、価値創造教育と人間教育は、コンピテンシーの養成という現今の世界的傾向と主たる考え方を共有していると言えるでしょう。

しかしながら、こうした池田先生の考え方が、それが発表された当時、すなわち 1960 年代後半においては、かなりまれなものであったという事実には注意しなければなりません。当時我が国は、急速な高度経済成長時代の結果として、環境汚染や、荒れ狂う学生紛争に象徴的な教育の行き詰まりなど、深刻な問題が露わになっていました。同時に、競争原理やエリート主義が日本社会で支配的であり、教育の成果の尺度は、もっぱら知識やスキルに基づいていました。このような状況を踏まえると、過度な競争社会の時代においては非効率的に映ったであろう池田先生の人間教育という考え方には、珍しさというだけでなく、先見性をも見る事ができるのです。

現在創価大学は 2021 年の創立 50 周年を目指し、数多くの取り組みを進めています。現在その半ばを過ぎて着々と成果が上がっているところです。また開学以来の本学のグローバル化の取組は、——池田先生が示された建学の理念の三番目を思い出してください——模範的な取組として、3 年前に文部科学省に認められました。先進的 37 大学の一つに選ばれた本学は、10 年間にわたる公的補助金の採択も得ており、人間教育の世界的拠点という新たな目標へ向けて様々な取組を進めています。一例を挙げれば、日本人学生のほぼ全員に在学中に少なくとも一回は海外での修学体験をさせ、国際意識と異文化理解力を養成してもらいます。同時に、海外からの留学生数を飛躍的に増大させ、創価大学の人間教育を体験してもらいます。さらに平和・環境・開発・人権の 4 分野にわたる教育研究拠点として本年 5 月にグローバル・コア・センターを発足させました。2 年後にはこの分野における大学院開設につなげて行く予定です。

今後ともこうした取組を通じて、21 世紀の国際社会に新たな価値を創造することのできる学生を育成していくこととなります。

最後に、創価教育の理念と創立者の池田先生の指針を振り返り、講演を締めくくることにしたいと思います。

これらは以下の言葉に集約できます。

「創造的人間」たれ！ 創造的な人間たることを追求する日々を生きよ！

汝自身が価値の創造者たれ。

ナイロビ大学と創価大学の双方において、我々ひとりひとりが同じ目標を共有し、共に協力し合って平和を追求していくことを念願するものであります。この貴重な機会を頂けたことに、いま一度深く感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。